

# 年輪

中 沢 義太郎

先日、用事でデパートの時計売場をのぞいてみた。そこに、三つ四つ、年輪のあざやかな模様の見事な木に埋め込まれた置時計があった。本体はどれも同じ型のものであったので、年輪の美しいものにするにしよう。年輪についてだが、同じ木でもその年々によって、春材部分の幅に差がみられ、秋材部分にも線の太さに差があり、その色も異なっているのには驚いた。恐らく、この重なり具合でこの木の歴史をはかることが出来るであろう。大雪の年、降雨量の多い年、それらによる栄養の多少、樹勢、そして、年々の気温の状態など、さまざまな影響によって出来上がったものだと思う。いずれにせよ、年を経るにしたがってその輪を増し、それらがお互いに助け合いながらまとまって、線の色・太さなどで織りなす美しさを形作っていることに間違いはない。そして、それらを内に秘めて一本の木（伝統）を作っている。

伝統とは何んと素晴らしいものであり、力強いものなのだろうか。

さて、西高の卓球部も、三十の円輪を持った年輪となった。その円輪の一つ一つに個性がある。傑出した色つやをもった円輪もあれば、それをしっかりと抱きかかえて透き間を作らず次の世代に伝承している円輪もあ

る。それらがしっかりと支えあいながら生きている様は、誠に美しいという以外にない。

創成期のことなどは、先輩の先生や諸兄から、しばしば聞かされる。それらについては、今回の記念誌にも詳細に書かれている。また最近でも大学などで大変頑張っていることを耳にする。それらが、また西高卓球部のたくましい円輪の一つとして加わり、一本の木の成長の構成要素となるのであろう。たのもしいかぎりである。

現時点では、なんの変哲もないような秒針の移動（練習・ミーティングなど）であるが、それらがみがかれ、一つの美しい円輪を刻み込むのだという意識の下に努力していこう。その年々の個性ある円輪を形作り度いと考えている。先輩達の後輩への温かく厳しい指導助言を期待し、今後の卓球部の活躍を祈りつつ筆をおかせていただく。

